「シルミド」を観て

最近、韓国制作の映画、TV ドラマに人気がある。若者に誘われて映画館で「シルミド」を観た。

「シルミド」は、実際にあった「シルミド事件」を題材とした映画で、敵国の要人暗殺を目的として組織された非公式の特殊部隊が、国策の変更に伴い、その部隊は無用の長物なり、部隊の存在、隊員の存在さえ闇の中に抹消・抹殺されることに怒り、自らのアイデンテイテイを求めて大統領に直訴するため首都に向かう途中で、正規軍に殺傷される過酷な運命を描いたものである（実際の事件の真相さえ、まだ十分に明らかでないようである）。

映画を見終わり、なぜかメル友から以前に教えられた、英国の「コヴェントリー市民・大空襲」のことを思い出した。

先の大戦時、ドイツ空軍のコヴェントリー市に対する大空襲計画を事前に掴んだ英首相チャーチルは、予め対抗措置をとればドイツ側がイギリスによる暗号解読の事実を疑うことになると恐れ、政府としてはコヴェントリー市民にはいかなる警報も出さず、結局、数万の生命を犠牲にしたという（今に至るまで、英国の大多数の人々に、倫理的に正しいチャーチルの決断だったと容認されているとのこと）。

映画「シルミド」といい、「コヴェントリー市民・大空襲」といい、国家と個人の関係を考えさせられる。

この２つのことに限らず、時に国家は政策の前に多数の国民のためには、一部の国民の存在には非情にさえなるということであろうか。

国民が望むべき国家とは、どういう国家なのだろうか。

いやはや難題であるが、国家（政策）に対して、イエス、ノーの意志表示の出来る民主主義体制における国民一人一人の選挙権行使が、望むべき国家を選択して行くという、途方もなく重要なものであることだけは、確かなようである。

（2004 年 07 月 07 日　記）